

<原著論文>

脳卒中後疼痛が心身機能および健康関連 QOL に与える影響

今井 寛人¹⁾, 小枝 周平²⁾, 清水 寛己¹⁾, 佐藤 真央¹⁾, 高橋 良³⁾, 小池 祐士²⁾, 澄川 幸志²⁾

- 1) 財団法人黎明郷弘前脳卒中・リハビリテーションセンター
- 2) 弘前大学大学院保健学研究科
- 3) 医療法人共和会小倉リハビリテーション病院

脳卒中患者の痛みは約 50%と高頻度に生じ、運動機能や ADL 能力の低下、抑うつ症状といった心身機能や日常生活能力、健康関連 QOL (以下 HRQOL) に悪影響を招く。痛みが心身機能や日常生活能力、HRQOL に与える影響については、これらの様々な相互関係を考慮して検討した先行研究は少ない。脳卒中患者に対するリハビリテーションは、痛みをコントロールするマネジメントのほかに、運動麻痺や感覚障害、ADL 能力低下といった様々な症状の治療とを並行して進めていく必要があるため、それぞれの関係性を考慮して検討することは痛みを有する脳卒中患者の問題点がより明らかとなり、より良いリハビリテーションの方針の決定に役立つと考えられる。そこで、本調査では回復期の脳卒中患者 33 名を対象に、脳卒中後疼痛の有無が心身機能、日常生活能力、HRQOL に与える影響について調査・検討した。

その結果、痛みを有する脳卒中患者は、抑うつ症状を呈しやすいという傾向が見られた。さらに、この抑うつ症状は痛みの程度との相関が認められず、痛みの存在自体が抑うつ症状を引き起こすことが明らかになった。また、痛みを有する脳卒中患者は、SF-36 の下位項目である「日常役割機能 (身体)」が有意に低下していたことから、痛みの存在自体が HRQOL の「日常役割機能 (身体)」の低下を引き起こすことが明らかになった。

本調査の結果から、脳卒中患者は痛みを有すること自体が問題となるため、リハビリテーションでは、早期から痛みの発生を予防する治療を継続的に行うほか、麻痺肢の使用時に使いにくさを感じさせないように活動性を維持させる必要がある。また、痛みがある患者には抑うつ症状に対して注意を払い、必要に応じ精神的なケアを実施していくことが重要である。

キーワード：脳卒中、痛み、健康関連 QOL、抑うつ症状、リハビリテーション

<トピックス>

慢性疼痛疾患における前頭前野の機能低下とリハビリテーション介入の可能性

大住 倫弘^{1,2)}, 森岡 周¹⁾

- 1) 畿央大学大学院健康科学研究科
- 2) 摂南総合病院認知神経リハビリテーションセンター

近年、痛みに関する脳機能イメージング研究が多く報告されてきている。特に慢性疼痛患者の前頭前野の機能の異常に関する報告が注目を集めている。本稿では中でも思考に関わる外側前頭前野に着目し、その機能低下が慢性疼痛とどのように関係しているのかについて神経科学の知見から述べる。また近年、前頭前野の活性化は下降性疼痛抑制系との関わりによってトップダウンに鎮痛をもたらすと考えられている。本稿では、特に前頭前野の外側部を活性化させる「注意」・「再解釈 (reappraisal)」による鎮痛効果に関する研究を紹介し、リハビリテーション介入の可能性と今後の課題について述べる。

キーワード：慢性疼痛，前頭前野，注意，再解釈